婦人の目

子どもの夏の体験

藤屋　紀子

ことしの夏休みも二人の娘は、教会主催の労働キャンプに参加し、独居老人の家の掃除や草取りなど、六日間汗を流す体験をしてきた。

この労働キャンプには、地区の中・高校生が三十五人参加していたが、かれらは「人のために汗を流すのは楽しい」とか、「自分はどれほど両親に愛されているかを発見しました」とその感想を述べていた。

神のみ手から父母を仲介者として、次第にその体・心・霊の責任と課題を受け入れる時期にきた子供たち。家庭が全世界であった時期から、少しずつ脱皮し、外へ出かけ、自分の知らなかった世界へ目を向けはじめる中学生時代。

十二歳の少年イエスが自らすすんで神殿に残られた時期も、やはり心身ともに親からの自立の芽ばえがあったのであろうか。

独居老人の家を訪問していたら、近所のアルコール中毒患者らしい人がやって来て、わけのわからないことを言ってくるのに困った。おじいさんは、ほっておきなさいと言われたけれど、私は心配で民生委員さんを呼びに行った、という娘の話を聞きながら、彼女らが体験するさまざまな出来事に目をつぶるのではなく、驚くべき世界、考えたこともない生活があったとしても、まだ、希望を捨てないで人々に奉仕できる恵みをキリストに願ってほしいと思った。

してもらいたい、ほめてもらいたい、認めてもらいたいという子供の感情から自らの意志と同意で、「する・ほめる・認める」という積極的な生き方を親はその手本で示さなければとつくづく考えさせられた。その生き方の中から少しずつ、聖フランシスコの「理解されるより理解すること。愛されるより愛することを」という祈りが、口先だけでなく生き方となって来るのかもしれない。

家庭だって、夫を疎外したり、妻が疎外されたりしている時、皆は生かし合わず、弱点をさらけ出しているものである。

お互いを生かし合い、助け合う時、それぞれは力を発揮し、生き生きしてくる。生きる原動力である家庭はそうでなければ人間は本当に育たない。この夏休み、自立しなければならないのは親であるとつくづく感じさせられた。

（主婦）